

chapter

1

鳥類による被害の現状



1-1

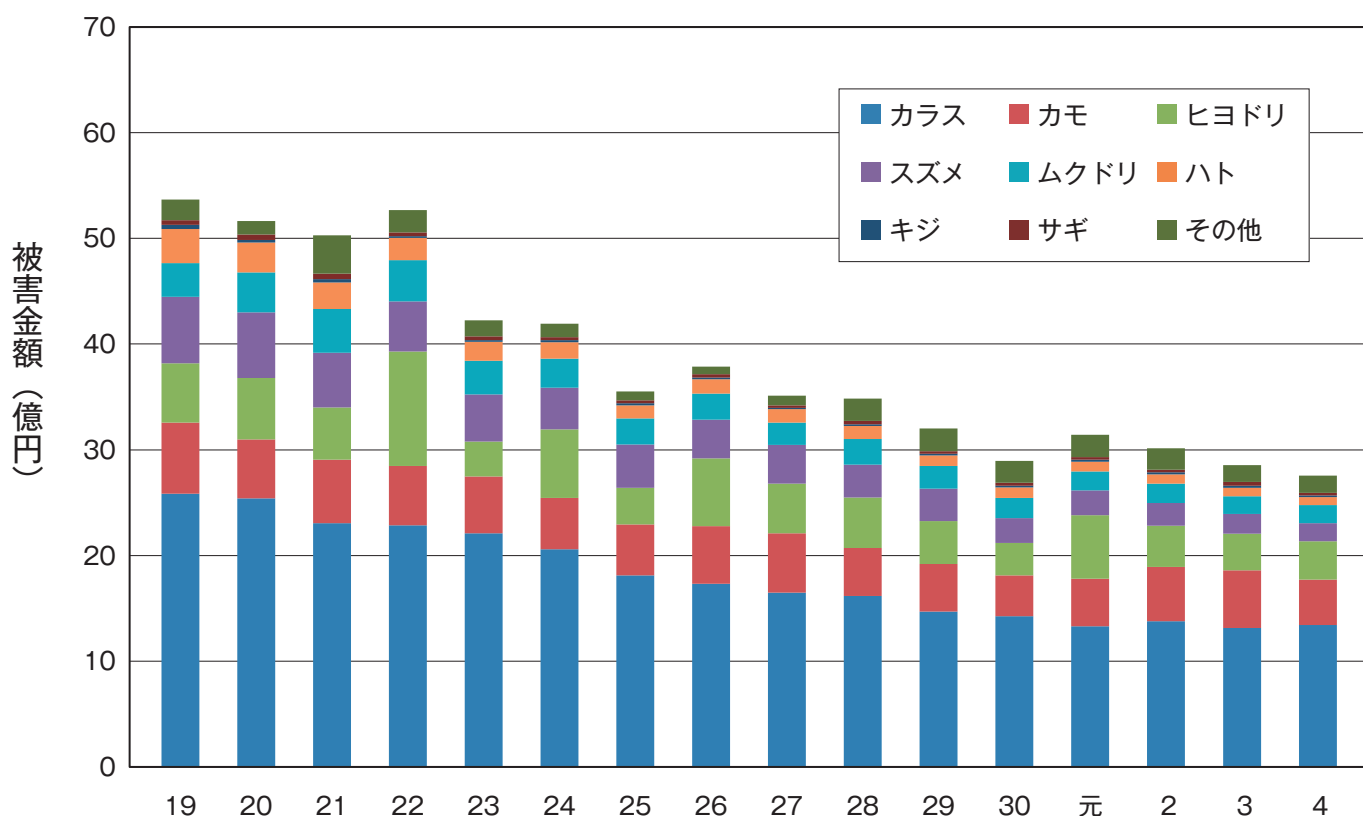
データで見る鳥害の現状



▶ 1. 農作物の被害は減少から下げ止まり傾向

野生鳥類による農作物被害金額は平成13年度の96億円をピークに下がり始め、ここ5年程度は30億円前後で下げ止まりの傾向にある(図1-1)。令和4年度の被害金額は28億円、被害面積は3,600ha、被害量は2万3千トンとなっている。減少の理由は被害対策が進んだこともあるが、自動撮影カメラなどの観察機器の進歩により、鳥の被害だと考えられていたものが獣であると判明したことなども挙げられる。

図1-1 野生鳥類による農作物被害金額の推移

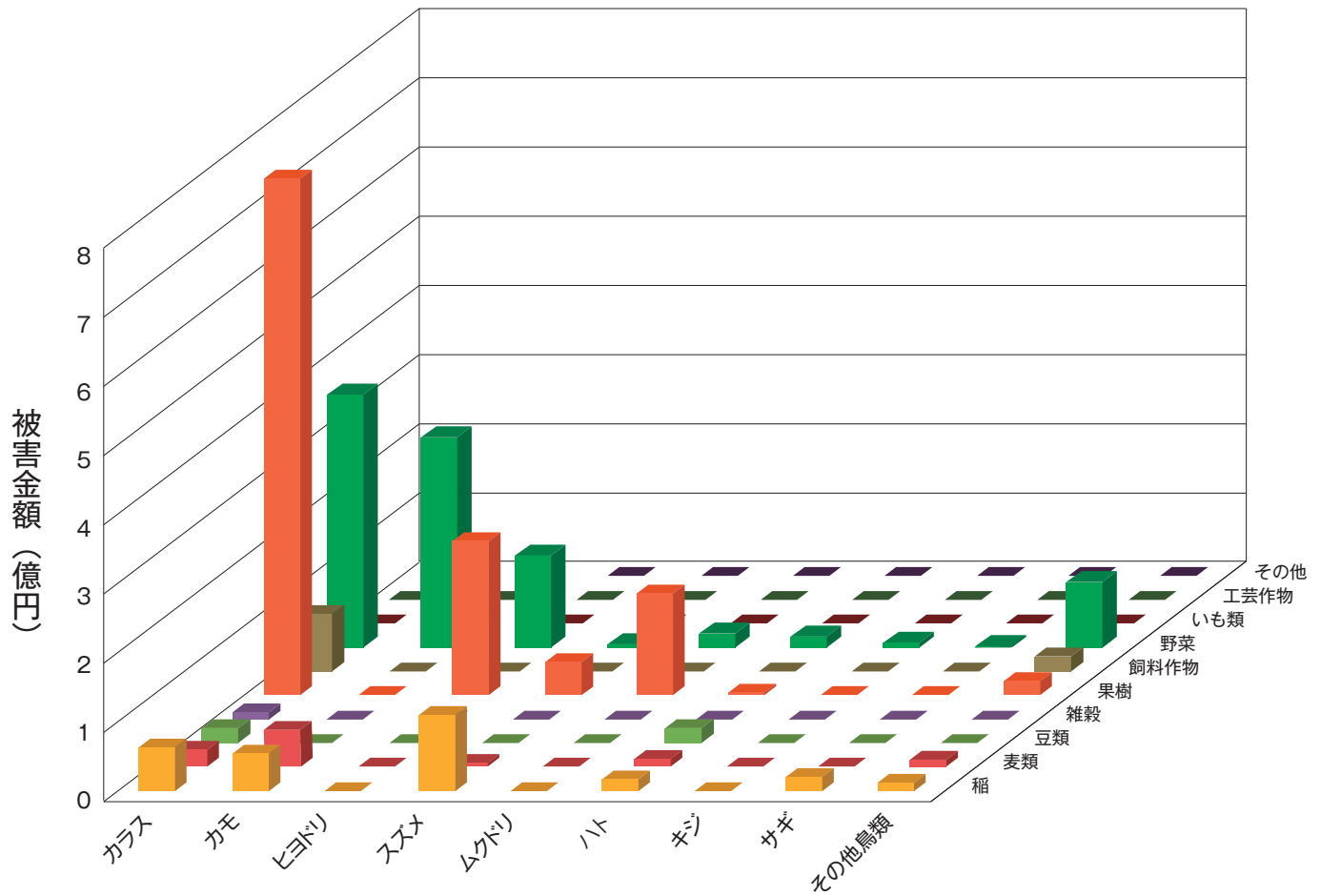


データ:「全国の野生鳥獣による農作物被害状況について(令和4年度)」(農林水産省)

▶ 2. 鳥類別・作物別の被害の傾向

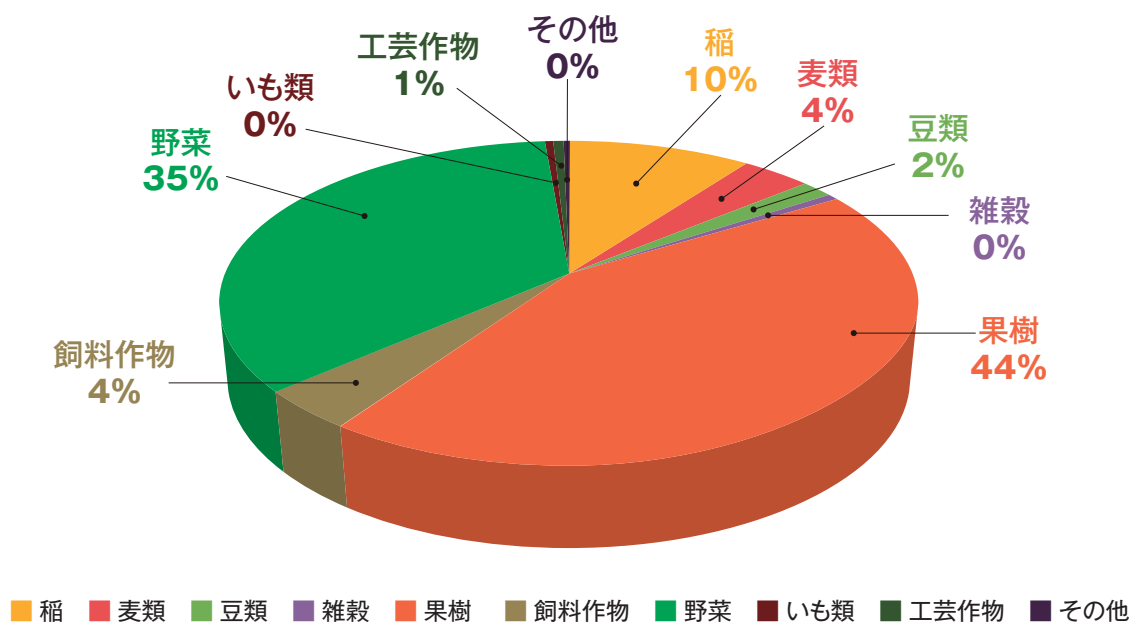
鳥の種類別では全体の49%の約13.4億円をカラス、16%の4.3億円をカモが占め、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、ハトと続く。いずれも私たちが普段よく見かける鳥である。作物別に見ると果樹で44%、野菜で35%とこの二つで大部分を占める(図1-2、図1-3)。

図1-2 鳥類別・作物別の被害金額(令和4年度)



データ:「全国の野生鳥獣による農作物被害状況について(令和4年度)」(農林水産省)

図1-3 鳥による作物別被害金額の割合(令和4年度)



データ:「全国の野生鳥獣による農作物被害状況について(令和4年度)」(農林水産省)

▶ 3. 獣害と鳥害

令和4年度の野生鳥獣による被害金額156億円のうち、約8割が獣、残りの2割が鳥によるものである。獣に比べ鳥による被害は少ないが、作物や地域によっては大きな被害を受けることもある。対策を考えるとき、基本的には獣は二次元で侵入防止柵を考えればよいのに対し、鳥は空を飛べるため上面を含めた三次元で考えなくてはならず、移動能力が高いため被害の発生ムラも大きい。加害種を正しく判定し、適切な対策を取ることが重要となる。

▶ 4. その他の被害

水産分野では、養殖鮎の放流時のカワウによる捕食が、カワウ個体数の増加に伴い日本各地で問題になっている。養魚場や釣り堀などでのサギ類（主にアオサギ、ゴイサギ）による被害、養殖のりやしじみなど貝類のカモ類による被害などもある。生活（生態系）環境被害として、サギ類の集団繁殖地（コロニー）や、ムクドリやカラスの集団ねぐらでは、フン害や騒音などが問題となっている。